

# 日本短期研修を通じた学習者の日本文化に対する先入観の変化 に関する研究

Prejudic points to Japanese Culture of Learners through Short-Term Training in Japan  
Research on Change special cation

安秉杰・金愛東

## Abstract:

The average age of the participants in the current study was 19.5 years in terms of demographics of the study. The gender was short-term training focused on girls rather than boys. In the school year, most of the participants were enrolled in first and second year students. The motivation for short-term training is that the Japanese culture experience is a major concern of short-term training. Although there is a change in prejudice about Japanese culture and influences on Japanese culture about the influencing factors of cultural experience, it is implied that there is still no change in confidence in Japanese people. The change in the characteristics of responsibility for the Japanese and the attitude of the diligence can also be judged that there is a change influence before and after the training. In addition, there is a change in prejudice against the Japanese, and Japanese understand that the prior perception that they understand Koreans is different from before and after the training. And it can be seen that the perception that the Japanese can become closer to Koreans is changing. As I became more interested in Japanese in terms of recognition of the necessity of Japanese learning, I thought that I felt the necessity of studying Japanese even more after the training and after the training. The Japanese people's intimacy toward Japanese.

**Keywords** : Short-Term Training, Change in Prejudice, Need to Learn Japanese, Japanese Culture, Familiarity with Koreans, Japanese education, survey

## 1. 序論

一般的に、学習者の学習の動機に影響を及ぼす環境的要因には、外的要因と内的要因があると言われている<sup>1</sup>。近年の研究では、学習者の内的・心理的環境要因は非常に複雑で多様であること、そしてそのように複雑化し多様化した内的環境要因が学習者の勉学活動に影響を与える可能性が高いことが指摘されている。したがって、これに関する考察と研究がすすめることは重要である。学習者の心理的状态などを表す内的要因は、確かに学習の動機に影響を及ぼすことは容易に推測される。特に、学習者自身が選好する学科目と関連が高いと認知している、他の様々な観念や意識水準などは、該当の学科目の選好度や何を学習しようかという決定などに大きな影響を及ぼす要因であると推定される<sup>2</sup>。

本研究は、日本語関連科目を受講している学生の内的・心理的要因が、日本語を学習するにあたってどのような影響を及ぼしているかについて調査・分析をする。特に日本語学習者の内的・心理的要因のうち、学習者が日本または日本人と接触することで得た、日本では一般的な事柄である日本人の諸々の意識が、日本語学習の意思決定に与える影響を分析しようというものである。このような分析は、学習者の肯定的な心理状態を誘導し、これを通じて学習者が意識を肯定的に変化させる一

<sup>1</sup> Woodman, R. S., and Griffin, R.(1993), "Toward a theory of organizational creativity", *Academy of Management Review*, pp.293-321.

<sup>2</sup> 安秉杰(2014), 「学習者の対日本意識水準が日本語勉学意思決定に及ぼす影響:ホリスティック(Holistic)教育論的観点からの考察」『韓国ホリスティック教育学会誌』第18冊 第3号, pp.93-105.』

助となるものである。こういった要因の有機的な関係を理解し、学習者への統合的な接近によって学習状況の改善を模索することは非常に重要である

近年韓国では日本との交流が加速度的にすすみ、また学生の日本への留学や日本における就業に対する関心も増加している。それにともない、日本語が習得でき日本文化が体験できる環境を求めて日本へ留学するものの数や、教育機関が主催する短期研修の数や参加者数も急増している。ところが、それらに内在する問題点がないかあるのか、あったとすればそれをどう改善すれば所期の効果をあげることができるのか等々に

についても研究は具体的に成り立っていないのが現実である。学生の効果的な語学研修のためにはより具体的で体系的な研究が必要であることは言うまでもない。このような問題意識を持って、本研究では、大学生の日本への短期研修が日本語学習と日本文化に対する先入観の変化にどのような影響を与えるかを把握しようとするものである。

より具体的な研究のために、日本の現地での研修経験と生活に具体的に接近し、研修期間中に学生がどのような方法を使用して日本語能力を向上させるのか、日本における経験が日本語学習と日本文化に対する先入観の変化にどのような影響を与えるかという部分に重点を置いて、考察と研究をすすめる。

本研究の詳細な目的は次の通りである。

- 1) 日本における短期研修の経験が、大学生の日本語学習と日本文化に対する先入観の変化にどのような助力の可能性を持つか。
- 2) 日本における短期研修に参加した学習者は、現地でどのような経験を積み、どのような方法を通じて日本語能力を向上させ、日本文化に対する先入観についてはどのような変化を及ぼすか。
- 3) 学習者は日本における短期研修を通じて、学習者自身の期待を満足させるに値する効率性を感じるか。

21世紀に入り、世界はグローバル化の時代を迎えた。国家間の障壁は崩れコミュニケーションの機会が増えただけではなく、コミュニケーションそのものの質も変化し、意思疎通はよりスムーズになった。その結果、日本語への関心はこれまで以上に高まっている。また、単に日本語を学習するだけでなく、それを駆使することのできる実際的なコミュニケーション能力に関する要求が大きく、日本語を自由に駆使するために日本語を学習するという大学生の意欲はこれまで以上に高い。私たちは国際化・グローバル化の時代に生きている。世界の中で日本語の位相は非常に高くなっており、これは韓国社会においても例外ではない。日本語の重要性及び必要性は増す一方であり、日本語教育の面では伝統的な教育内容や方法論に変化や改善が要求されている。近年韓国では意思疎通能力に重点を置いた、より実質的な日本語教育に力点が置かれている。

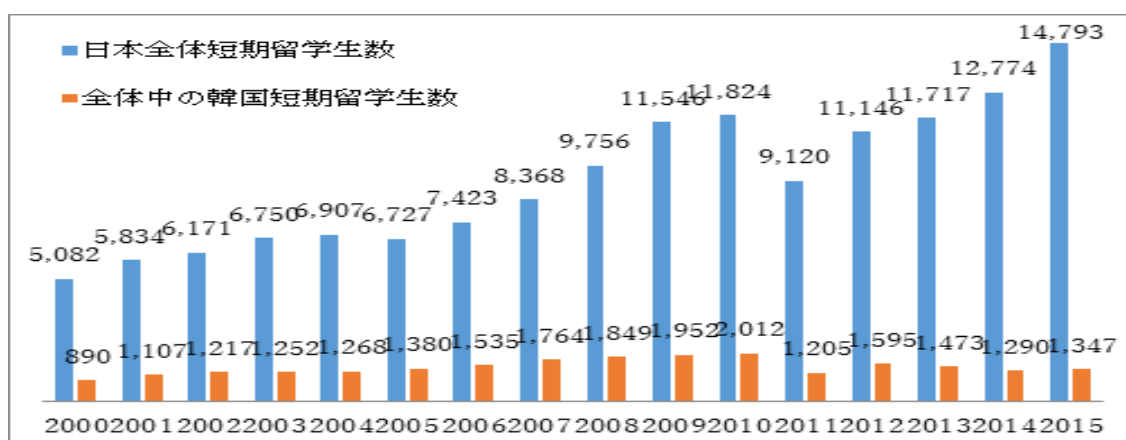
## 2. 日本における短期研修の推移

独立法人日本学生支援機構が調査した2000年度から2015年度までの短期留学現況によれば、2000年度には5,082人が短期留学生として日本を訪れている。東日本大震災が発生した2011年度には激減したが、翌2012年度からは再び上昇基調に転じて年々数は上昇し、2015年度には14,793人となった。このうち、韓国からの短期留学

生は2005年度の890人から2011年度の減少を経て2015年度には1,347人と増加している。韓国人留学生全体では、2000年度の12,851人から2010年度の20,202人までは増加し続け、2011年度からは減少している<sup>3</sup>。2011年度には短期留学生数も1,205人と減少したが、2012年度には1,595人と持ち直し、以降は横ばいである<sup>4</sup>。

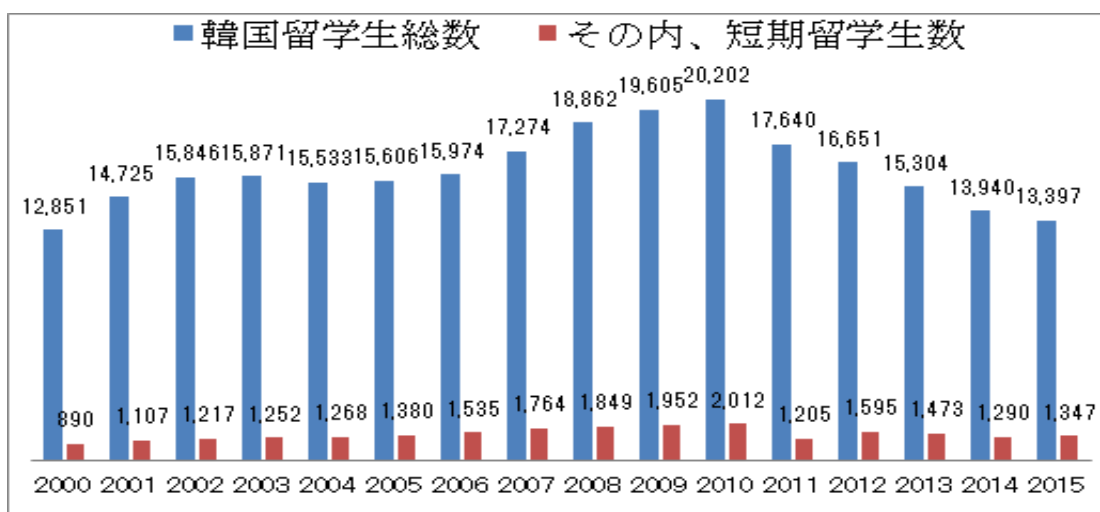
留学生の総数が増えているのに、韓国人留学生数が横ばいであるということは、韓国人留学生が全体に占める割合が低下していることを意味する。事実、初めて1000人を突破した2001年度においては、短期留学生の総数中韓国人留学生が20%を占めていたのに、2014年度においては、とうとうその割合は10%を切ってしまった。両国の交流推進に努力を重ねてきた者にとっては、これは看過できない事態である。それだけではなく、両国間の青年の交流のパイプが細くなることは、将来的には韓国はもちろん日本にとっても大きな損失を招きかねない。

〈図1 日本全体の短期留学生数と韓国からの短期留学生数推移〉



※資料：独立法人日本学生支援機構（JASSO）

〈図2 日本の韓国人留学生総数と韓国人短期留学生数〉



※資料：独立法人日本学生支援機構

<sup>3</sup> [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student/data2015.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2015.html)

<sup>4</sup> [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student/data2015.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2015.html)

実は減少基調にあるのは、韓国人短期留学生数だけではない。短期留学生を含めた韓国人留学生は、新しい世紀を迎えてからあと、2010年に至るまでほぼ一貫して増加し続けてきた。ところが、2011年以降は一貫して激減し続けており、2015年度に至ってはとうとう2001年の総数を下回ってしまった。東日本大震災だけではなく両国の政治関係の不安定さや韓国の経済状況等いろいろな原因が考えられるが、いずれにしても、その減り方は異様に大きい。ところが、それに比べると短期留学生数の増減の波は穏やかであり、韓国人留学生中で短期留学生が占める割合は、2001年においては7.5%であったが、2015年度においては10%をわずかながら上回っており、それは2010年度の割合とほぼ同じなのである。

2014年度には留学生全体の11,428人のうち1,711人と約15%を占めている。2010年度以降留学生全体数は減少傾向にあるが短期留学生数は横ばいで、留学生全体に占める短期留学生の割合は増加している。

〈表1 短期教育プログラムによる国別外国人学生数（上位10か国）〉

国名	留学生数		前年度比増減	
	2014年度	2015年度	人数(人)	割合(%)
中国	2,198	1,730	468	27.1
韓国	1,711	1,717	▲+6	▲ +0.3
台湾	1,329	1,007	322	32.0
アメリカ	1,187	1,137	50	4.4
タイ	1,186	908	278	30.6
インドネシア	618	357	261	73.1
マレーシア	378	190	188	98.9
オーストラリア	333	326	7	2.1
ベトナム	261	182	79	43.4
フィリピン	212	88	124	140.9
その他	2,015	1,683	332	19.7
合計	11,428	9,325	2,103	22.6

※資料：独立法人日本学生支援機構

〈表2 短期教育プログラムにおける期間別外国人留学生数（2014年度）〉

国(地域)名	2週間未満	2週間～ 1か月	1か月～ 3か月	3か月～ 6か月	合計
中国	1,013	821	317	47	2,198
韓国	796	754	129	32	1,711
台湾	692	542	83	12	1,329
アメリカ合衆国	277	389	450	71	1,187
タイ	517	433	220	16	1,186
インドネシア	294	245	69	10	618
マレーシア	205	96	54	23	378
オーストラリア	109	153	70	1	333
ベトナム	152	81	28	0	261

フィリピン	156	36	18	2	212
その他	656	755	520	84	2,015
合計	4,867	4,305	1,958	298	11,428

※資料：独立法人日本学生支援機構

短期研修の期間別統計を見ると、二週間未満の日程が最も多い。例えば2014年度は二週間未満の日程は全体1,711人のうちの796人で46.5%、二週間から一ヶ月は754人で44%となっており、短期留学生全体の90%以上が長期休暇を利用した短期研修で日本を訪れるという傾向がみられる。

以上をまとめると、日本で学ぼうとする韓国人留学生の総数は近年大きく減少しているが、これに対して短期留学生に関しては、その変動はずっと穏やかである。出身国における学業に影響が及び、経済的負担も大きい長期間の留学よりも、学病にはあまり影響がなく、経済的負担もそれほど大きくはない短期研修が好まれているのである。これを踏まえ、本研究では、最近短期研修に参加した学生の意識を詳細に調査・分析することを試みたいと考える。

具体的には、2016年12月15日から25日までの11日間、ソウル近郊の私立N大学校と地方所在の国立K大学校の二校から日本への短期研修に参加した学生38人に対するアンケート調査を通じて、短期研修への参加の動機や日本への短期研修の人口統計学的側面などを調査した。また、日本文化の体験という影響要因と日本文化に対する学生の先入観については、短期研修の実施前と実施後で日本人に対する学生の先入観や偏見の変化を検出して、日本人と韓国人はさらに友好的になることができるという認識の変化を推定しようとする。また、このような環境では、学生の日本語学習の必要性に対する認識という観点から、研修前と研修後で日本語学習の必要性をより一層感じるという考えが変わったことを把握し、学生が接した日本人の韓国人に対する親密度、学生の日本文化への関心、日本人に対する責任感などの特性要因が日本語学習の質の要請に影響をどのように与えるかを把握しようとする。人口統計学的分析のためのアンケートは、学生の年齢、性別、学年などを利用する。日本に対する先入観の変化に関するアンケートでは、日本人は偏見性があるという認識、学生が接した日本人の韓国人に対する理解や韓国人に対する親密度、日本文化への関心、日本人への責任感などの特性要因を利用して、学生の日本語学習の必要性に対してどのような項目で影響があったのかを判断して、本研究の目的を達成しようとする。

この研究は、日本への短期研修を希望する学生に事前情報として利用することができるかと判断される。また、それだけではなく、より長期的な視野に立てば、両国関係の改善等、外部的な要因の変化に左右されない、留学希望者の意識を調査することにより、将来、諸般の情勢が変化したときに、再び、日本への留学を志す学生の意識付けや動機の向上にもつなげることが可能であると考えられる。

### 3. 研究方法

#### 3.1 研究対象

本研究にあたっては、首都圏近郊に位置する私立N大学校の日本短期研修プログラム（日本の大学との協定に基づく交換研修プログラム）に10泊11日間参加した40人

の大学生のうち、38人の学生に研修前と研修後の二回にわたってアンケート調査を実施した。そのうち5人の学生を対象に、より具体的な設問から構成されるインタビュー調査を実施した。

### 3.2 短期研修プログラム概要

本研究で対象とした11日間の短期研修プログラムは、マス・メディアを通じて韓国でもよく報じられる東京や大阪などの大都市を敢えて避け、地方の中核都市において地域住民との交流を機軸に実施することで、いわば生の日本及び日本人の姿や日本人の生活に触れることで、その後の自発的な学びを促すことを目的としている。その内容は次のとおりである。

導入として、日本の環境への適応を目標に、開講式及び地震などの危機対処訓練を実施した。研修は室内プログラムの他、多様な野外活動を通じて学生が新しい環境に適応するように構成した。研修の中盤部は、言語能力の成長を目標に立て、新しい文化や生活などの経験を積み、他の文化や生活に対する理解度を高めて、これを通じて言語活動を強化するように構成した。研修の終盤には、自由活動により現地での自律的なプログラムを立て、活動課程を通じて言語認知能力を高めるよう、プログラムを構成した。研修の最終段階では、日本人学生と共同プログラムを実施し、多様なプログラムの中で自然に言語活動が行われるようにプログラムを構成した。

具体的には、<sup>5</sup>青少年自然の家における滞在を通して実行するプログラムを活用する。青少年自然の家の指導員による指導で、周辺施設などを利用して文化を体験し身に付ける機会を持ち、協定大学で準備したプログラムでは日本人学生と寝食を共にし、共同体験などを担当教授の指導で実施した。また、近郊の天体科学館や水族館などの周辺施設を利用して、日本の自然環境を感じ、体験する機会、さらには、温泉施設などを利用して、日本文化を体験する機会も設けた。また、最終日の夜には現地の韓国語教室を受講する日本人と特産品の松葉ガニを含む各種日本食を体験するなど、多様な活動を経験し、現地の学生や住民と共に活動できる機会をさまざまに提供した。

### 3.3 研究ツール

本研究では、大学生の日本における短期研修の効果を調べるために、日本の短期研修プログラムに参加した大学生を対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査は、安秉杰・金愛東（2015）<sup>6</sup>が構成したアンケート紙を適宜修正、補完、及び再構成して使用した。本アンケートは、研修にどの程度適応したか、心理的な状態はどうであったか、日本語の実力の向上はどの程度であったか、韓国の大学生が日本に短期研修に訪れることに対してどのように思うか、日本での短期研修プログラムにはどのような長所と短所があると思うか、大学生の交換学生プログラムに対してどのように思うか、などの領域について設問を用意した。研修後、研修に参加した学生の中から5人を無作為に選び、フリーインタビューの形で参加学生の日本語学

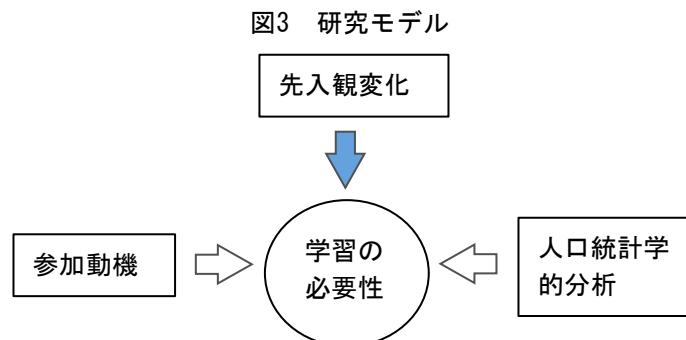
<sup>5</sup> 国立青少年教育振興機構 <http://www.niye.go.jp/about/history.html>

<sup>6</sup> 金愛東,安秉杰(2015)「日本短期研修を通じた学習動機誘発及び日本文化に対する態度変化に関する研究」『韓国日本語文学会』第67集、pp.75-98.

習効果、学習態度、興味関心などに関して聞き取り調査を行った。

#### 4. 研究モデルと仮説の設定

##### 4.1 研究モデルの設定



本論文では、日本における短期研修を通して学習者の日本文化に対する先入観の変化のパターンを把握するために、図1のようなモデルを使用する。

人口統計学的分析に関しては年齢、性別、学年を利用した。短期研修に参加を決めた動機に関しては、両親の勧め、日本文化を体験するため、日本語の実力を高めるため、友人の勧め、その他の回答例を設けた。先入観の変化についてのアンケートでは、学生が見た日本人には偏見性があるとの認識、日本人の韓国人への理解、日本人の韓国人に対する親密度、学生自身の日本文化への関心、日本人についての責任特性要因を尺度として使用した。日本語学習の必要性は、上に列挙した設問の中からどのような設問項目が影響を与えるかを判断し、本研究の目的を果たそうとするものである。

#### 5. 資料の分析、及び仮説の設定

##### 5.1 人口統計学的分析

人口統計学的分析は、回答した学生の年齢、性別、学年を利用し、表3、表4、表5にまとめられる。

調査対象についての年齢関連情報は平均19.5歳（標準偏差0.9227）で19歳と20歳が全体の76.3%である。性別は男子学生が26.3%、女子学生が73.7%と。学年は参加学生の92.1%が1、2年生であった。

〈表3 年齢人数分析の結果〉

年齢	人数	パーセント
18	4	10.5
19	17	44.7
20	12	31.6
21	4	10.5
22	1	2.6
合計	38	100.0

〈表4 性別人数分析の結果〉

性別	人数	パーセント
男性	10	26.3
女性	28	73.7
合計	38	100.0

〈表5 参加学年人数分析の結果〉

学年	人数	パーセント	有効パーセント
頻度	1	25	65.8
	2	10	26.3
	3	2	5.3
	4	1	2.6
	合計	38	100.0

## 5.2 参加動機の頻度分析

〈表6 研修参加動機の分析の結果〉

研修参加動機	人数	パーセント	有効パーセント
頻度	1	21	55.3
	2	11	28.9
	3	5	13.2
	4	1	2.6
	合計	38	100.0

表6の短期研修参加の動機についてのアンケートでは、1. 両親の勧め、2. 日本文化を体験するために、3. 日本語の実力の向上、4. 友人から日本語学研修について話を聞いてまたは友人の勧め、5. その他の回答例を設けた。結果、日本文化を体験するためという回答が最も多く55.3%、友人の勧めは次いで多く28.9%、日本文化体験が短期研修の重要関心事項であることが分かった。

## 5.3 日本文化に対する先入観の変化の分析

本研究の目的である日本文化に対する先入観の変化の分析を検証するために、表7のような仮説を設定した。分析方法はSPSS18バージョンを利用した頻度分析と、対応標本T検定と、他重回帰分析を利用した。

〈表7 仮説設定〉

番号	仮説
仮説1	研修前と研修後の文化体験に関連した影響効果の要因
仮説1-1	日本文化に対する認識が研修前と研修後に影響がある
仮説1-2	日本文化に関心が研修前と研修後は影響がある
仮説1-3	日本人に対し、信頼度は研修前と研修後は影響がある
仮説1-4	日本人の責任感については研修前と研修後は影響がある
仮説1-5	日本人に対し、勤勉性の態度については研修前と研修後は影響がある
仮説2	研修前と研修後の日本文化に対する偏見についての効果要因
仮説2-1	日本人は偏見があるという認識が研修前と研修後は変わった
仮説2-2	日本人は韓国人をよく理解しているという事前認識が研修前と研修後は変わった
仮説2-3	日本人は韓国人ともっと親しくなれるという認識が研修前と研修後は変わった
仮説3	日本語学習の必要性の認識が研修前と研修後は変わった
仮説3-1	日本語に関心がもっと高くなって日本語勉強の必要性をもっと感じたという考えが研修前と研修後は変わった



## 6. 実証分析結果

文化体験の影響要因に関するアンケート結果は表8で表す。

〈表8 短期研修の前と短期研修の後の文化体験の影響要因分析〉

研修前(0)-研修後(1)	対応の差					t	自由度	有意確率 (両側)
	平均	標準 偏差	平均標 準誤差	差異の95%信頼区間				
				下限	上限			
文化認識0-文化認識1	-.395	.755	.122	-.643	-.147	-3.224	37	.003***
文化関心0-文化関心1	-.421	.948	.154	-.733	-.109	-2.737	37	.009***
信頼度0-信頼度1	-.211	.811	.132	-.477	.056	-1.601	37	.118
責任感0-責任感1	-.474	.893	.145	-.767	-.180	-3.272	37	.002***
勤勉性0-勤勉性1	-.421	.793	.129	-.682	-.160	-3.273	37	.002***
Significance level(有意水準)			***p<0.01, **p<0.05, *p<0.1					

この表では、研修前と研修後で日本文化に対する認識の変化があるとみなされ、学生には日本文化に対する先入観の変化があったと結論をくだすことができる。しかし、日本人への信頼性については研修の影響で変化したとは言い切れないことが明らかとなっている。日本人の責任特性と勤勉な態度の変化については、研修前と研修後で変化があることが検出された。

〈表9 短期研修前と後の日本文化に対する偏見について〉

研修前(0)- 研修後(1)	対応の差					t	自由度	有意確率 (両側)
	平均	標準 偏差	平均標 準誤差	差異の95%信頼区間				
				下限	上限			
偏見性0-偏見性1	.316	1.042	.169	-.027	.658	1.867	37	.070*
韓国理解0- 韓国理解1	-.289	.835	.136	-.564	-.015	-2.136	37	.039**
韓国親密0- 韓国親密1	-.447	.724	.117	-.685	-.209	-3.809	37	.001***
Significance level(有意水準)			***p<0.01, **p<0.05, *p<0.1					

〈表9〉では日本人は偏見性があるという認識が研修前と研修後で変わらないとする回答は10%未満で、日本人に対する偏見について変化があったと結論を下すことができる。日本人は韓国人をよく理解しているという認識もやはり研修前と研修後で変化があったと言えるだろう。日本人は韓国人ともっと親しくなることができるという認識についても、研修後には変化があり、研修が影響を与えたと結論付けられる。

〈表10日本語学習の必要性に対する認識について、研修前と研修後の化〉

研修前(0)- 研修後(1)	対応の差					t	自由度	有意確率 (両側)
	平均	標準 偏差	平均標 準誤差	差異の95%信頼区間				
				下限	上限			
学習必要0- 学習必要1	-.500	.923	.150	-.803	-.197	-3.340	37	.002***
Significance level(有意水準)			***p<0.01, **p<0.05, *p<0.1					

〈表11 日本語学習の必要性に対する多重回帰分析の結果〉

		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	$\beta$		
従属変数	(常数)	1.225	.910		1.346	.188
	偏見性	.202	.175	.195	1.153	.258
	韓国理解	.134	.172	.141	.778	.443
日本語学習必要性	韓国親密	.316	.166	.371	1.898	.067*
	文化関心	.269	.153	.334	1.763	.088*
	信頼度	-.477	.188	-.527	-2.543	.016**
	責任感	.371	.172	.426	2.154	.039**
Significance level(有意水準)		*** $p < 0.01$ , ** $p < 0.05$ , * $p < 0.1$				

日本語学習の必要性に対する認識についてのアンケート結果は、表10に表される。この表から、学生は研修後には研修前より日本語に対する関心が高まり、日本語学習の必要性をより感じるようになったことが読み取れ、学生の日本語学習の必要性に対する変化があったと結論付けられる。表10の結果から、日本語学習の必要性に関する変化が検出されているが、この結果に対して研修後にどのような要因が作用したのかを調べるために、日本語学習の必要性を従属変数として、日本人は偏見性があるとの認識、日本人の韓国人理解度、日本人の韓国人に対する親密度、日本文化への関心、日本人の信頼性、日本人の責任特性要因を独立変数とし、多重回帰分析を実施した結果が表11である。この表では、日本人には偏見性があるとの認識、日本人の韓国人への理解は、日本語学習の必要性に統計的に有意ではない変因として表され、日本人の韓国人に対する親密度、日本文化への関心度は有意水準5%で、統計的に有意な一変因となっている。特に日本人の責任感特性要因は有意水準1%で、日本語学習の必要性の主な変因であることが分かる。

〈表12 仮説検証結果〉

番号	仮説	結果
仮説1	研修前と研修後の文化体験に関連した影響効果の要因	
仮説1-1	日本文化に対する認識が研修前と研修後に影響がある	採択
仮説1-2	日本文化に関心が研修前と研修後は影響がある。	採択
仮説1-3	日本人に対し、信頼度は研修前と研修後は影響がある	棄却
仮説1-4	日本人の責任感については研修前と研修後は影響がある。	採択
仮説1-5	日本人に対し、勤勉性の態度については研修前と研修後は影響がある。	採択
仮説2	研修前と研修後の日本文化に対する偏見についての効果要因	
仮説2-1	日本人は偏見があるという認識が研修前と研修後は変わった。	採択
仮説2-2	日本人は韓国人をよく理解しているという事前認識が研修前と研修後は変わった。	採択
仮説2-3	日本人は韓国人ともっと親しくなれるという認識が研修前と研修後は変わった。	採択
仮説3	日本語学習の必要性の認識が研修前と研修後は変わった。	

仮説3-1	日本語に関心がもっと高くなって日本語勉強の必要性をもっと感じたという考えが研修前と研修後は変わった。	採択
-------	--	----

本論文での仮説検証結果は〈表12〉に表される。この表からは、日本文化に対する先入観についての変化があること、日本文化に対する関心が変化したことが分かる。ただし、日本人に対する信頼度は研修前と研修後で研修に影響された変化はない。また、日本人に対する責任感特性と勤勉性態度の変化にも影響があることが分かる。そして、日本人に対する偏見の変化もあり、日本人は韓国人をよく理解しているという認識が研修前より研修後の方が大きく、日本人と韓国人がより親しくなることができるという認識もまた研修前と研修後で変化している。

## 7. 研究結果と示唆点

本研究では、日本短期研修を通じて次のような結果を導出できた。

第一に、人口統計学的側面では、年齢関連では平均19.5歳、学年では1、2年生が全体の92.1%を占め、性別は男子学生より女子学生の方が圧倒的に多い73.7%という結果を得られた。

第二には、短期研修への参加は、日本文化を体験するためという動機が最も多く、日本文化体験が短期研修の重要関心事項であること、また経験者から動機を得た学生も一定数存在したことがわかった。

第三には、文化体験による影響に関しては、日本文化に対する先入観についての変化があり、日本文化に対する関心にも変化が見られたが、日本人に対する信頼感についてはあまり変化が見られなかった。また、日本人に対する責任感特性と勤勉性態度にも、研修前と研修後で変化があり、短期研修の影響があると判断することができる。

第四に、日本文化に対する偏見についてであるが、日本人に対する偏見については研修前と研修後で変化が見られ、日本人は韓国人をよく理解しているという認識も研修後には変化が見られる。日本人は韓国人ともっと親しくなれるという認識についても、変化があることが分かる。

第五に、日本語学習の必要性に関する認識の面では、研修前に比べて日本語に対する関心が高まり、日本語学習の必要性を研修前より感じるという考えが、研修後には多く見られる。

第六には、日本語学習の必要性について、日本人には偏見性があるという認識、日本人の韓国人理解度、日本人の韓国人に対する親密さ、学生自身の日本文化に対する関心及び日本人に対する責任感特性要因が、日本語学習の必要性の変化に主たる変因として表れている。

したがって、今後、関連研究の方向としては、上記の内容を補いながら行われる必要があり、政策的な活用度を高めるためにはより多くの実証研究が行われなければならない。

### ◀参考文献▶

金愛東・安秉杰(2015),「日本短期研修を通じた学習動機誘発及び日本文化に対する態度変化に関する研究」『韓国日本語文学会』第67輯, pp.75-98.

- 安秉杰(2011), 「日本語専攻者の内的要因が専攻満足と学業成就に及ぼす影響『韓国日本語文学会』第51輯, pp.57-74.
- 安秉杰(2014), 「学習者の対日本意識水準が日本語勉学意思決定に及ぼす影響: ホリスティック(Holistic)教育論的観点からの考察」 『韓国ホリスティック教育学会誌』第18冊 第3号, pp.93-105.
- 金志宣(2014), 「ピア・ラーニングの協働的な学びに関する一考察」 『日本学報』101輯, pp.17-32.
- 고은(2006), 「이중언어사용 아동의 부모들이 갖는 모국어에 대한 가치기준과 경험적 의미」 『언어치료연구Vol.15No.3, 한국언어치료학회』, pp.143-162.
- 김혜진, 김향중(2015), 「창의성교양수업이 대학생의 성취동기, 학습몰입, 셀프리더십 및 의사소통에 미치는 효과」 『교양교육연구』 Vol.9, No.4, pp.245-280.
- 박성익(2005), 「홀리스틱교육의 학문적정체성과 발전방향 탐색」 『홀리스틱교육연구』 7(1), pp.34-56.
- 송민영(2006), 『홀리스틱교육사상』 서울: 학지사
- Anderson, G., J and Walberg, H, J.(1974), "Assessing classroom learning environments in K. Marjoribands(Ed)", *Environments for Learning*, Slough: NFFR, pp.120-142.
- Carlgen, I. (1999). Professionalism and teachers as designers. *Journal of Curriculum Studies*, 31(1), pp.43-56.
- Ryan, R. M., Stiller, J. D., Lynch, J. H.(1994), "Representations of relationships to teacher, parents, and friends as predictors of academic motivation and self-esteem", *Journal of Early Adolescence*, pp.226-249.
- Salvin, R. E. (2003), *Educational psychology: theory and practice-7th ed.*, Allyn and Bacon.
- Spencer, M. B. (1999), "Social and cultural influence on school adjustment", *Educational Psychologist*, 34, pp.43-57.
- Walberg, H. J. (1976), "The psychology of learning environments", *Review of Research in Education*, 4 Itasca, pp.27-42.
- Woodman, R. S., and Griffin, R.(1993), "Toward a theory of organizational creativity", *Academy of Management Review*, pp.293-321.
- [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student/data2015.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2015.html)